

地域と協同の

2017年6月25日発行

154号

研究センターNEWS

【巻頭言】

あなたの10年先のために、今何を考え努力しますか。

水野 隼人

私の団地での事例をご紹介します。

私の団地は四方を小山に囲まれ、テレビは組合をつくり「共同アンテナ」で見えています。ところが、組合設立27年が経過し、ケーブルの張替え等で多大な出費が必要となりました。一方最近の通信事情の変化は大きく変わり、使う人にとっては便利(?)になりました。

そんななか約300世帯の人に現状を「変えるか否かの選択」がせまられました。結論は3分の2以上の方の賛成で現状設備の補修を選択しました。

それには二つの理由がありました。

一つは、この団地が出来て45年。私の参加する自治会のうち一人・二人世帯が47%になり、これからもっと増えることが予測されます。

二つには、この年で先人のみなさんが苦勞して立ち上げた設備をやめ、新しい技術を覚え新たな出費は大変だ。という思いからでした。

もう一つの経験ですが、先日ある施設の主催で“徘徊”というビデオを見ました。そこには重い認知症の本人と家族がどのような状況に置かれ、どのような対応が必要かというドキュメントでした。

主催者予定の倍の観客の“タメイキ”と“食い入る視線”は皆真剣そのものでした。その目は、まさしく自分自身を「ドラマの主人公」にしていました。私の5年、10年先の姿を映しているかもしれません。

私の友人の事例も深刻です。

奥さんが入院で自分も足腰が不自由。屋敷の周りは草だらけ。食事のままならず。娘は遠方に嫁いで充分な手助けができない。

私はこの間、地域、暮らしという言葉を使ってきました。しかし、このような事例をみると、それは年齢にかかわらず“私の地域であり私の暮らし”を考え大切にすることだと思いました。そしてそこには“ひと”と“思いやる気持ち”が存在します。

昔向こう「三軒両隣」という言葉がありました。大切にしたい人たちです。

そして、この間生協運動をとおして共通の生きざまを語れる人たちの存在です。

この人たちがいてこそ自分の5年、10年先があると思います。

(みずの・はやと、全岐阜県生活協同組合連合会 名誉顧問、地域と協同の研究センター 顧問)

CONTENTS

【巻頭言】	1	●情報クリップ	9
あなたの10年先のために、今何を考え努力しますか。		●研究センター6月活動	11
水野隼人		●企画案内、書籍案内、7月の予定	12
■第17回地域と協同の研究センター通常総会	2	—研究センターや関係団体の企画からおしらせ—	
総会シンポジウム「2030年に向けて 持続可能なまちづくり」〈基調提案とパネルディスカッションから〉		▶くらしを語りあう会ニュースNo.30、プチフォーラムinぎふ	13
■第17回地域と協同の研究センター通常総会報告	6	▶コープカレッジあいち・フィリピンでの協同組合づくりの支援	14
		から〜NPOアイキャンの活動〜	
		▶とうかい食農健サポートクラブ第17回総会記念シンポジウム	15

本号は研究センター第17回通常総会特集として、増ページの16ページ編集。6月活動は情報クリップ11ページに掲載しました

地域と協同の研究センター第 17 回通常総会記念シンポジウム

「2030 年に向けて 持続可能なまちづくり」 (文責：事務局)

5 月 27 日 (土) 第 17 回通常総会記念シンポジウムを、66 名の参加で開催しました。冒頭、基調提案「地域にねざした非営利・協同組織の連携構築を～2030 年へのメッセージ」が向井 忍専務理事からあり、朝倉美江氏 (金城学院大学人間科学部教授) のコーディネートで、3 つの実践報告がありました。提案・報告の一部を紹介します。

基調提案

「地域にねざした非営利・協同組織がつながる意味を考える～2030 年へのメッセージ」

はじめに

地域と協同の研究センターでは「食と農」、「地域医療・福祉・介護」、「グローバリゼーション (TPP 協定)」の領域を念頭に、生協を含む協同組織がどのように向き合うか、2015、16 年かけて検討し、2017 年総会で「持続可能なまちづくりをめざす 2030 年へのメッセージ」として発表しました。社会が直面する新たな問題を解決するために非営利・協同組合の特質を発揮し、協働して臨む事を呼びかけています。検討にあたっては、2012 国際協同組合年の翌年に開かれた 2013 年 1 月の ICA 総会は、2020 年にむけた「協同組合の 10 年へのブループリント」¹の枠組みも参考にしました。国連は 2030 年「持続可能な社会開発目標 (SDGs)」において協同組合の役割を位置づけており、昨年 12 月にはユネスコが“協同組合の思想と実践”を世界無形文化遺産に登録しました。メッセージの基調は、こうした期待や着眼点とも共通するものです。

「2030 年へのメッセージ」 主文 と三つの領域、三つのステップで 9 つのメッセージ

メッセージの主文は簡潔です。『20 世紀型 (経済成長・健全者モデル) の社会基盤は、グローバリゼーションと少子超高齢化の下で崩れつつあります。「2025 年」には、20 世紀型社会をつくってきた団塊世代が 75 歳 (後期高齢期) を迎えます。“社会連帯”に根ざし、多様な人間的つながりと支えあいが出たかに広がり、誰もが誇りをもって生きる地域社会づくりを可能にする、21 世紀型の“持続可能”な新しい社会基盤の創出は緊急な課題です。国や企業の原理に依存せず、市民一人ひとりが、非営利・協同の組織と暮らしを支える事業に参画し、新たな制度や法的枠組みの確立をめざし、協働の力を大きくすることが不可欠です。世界各国の「共通の利益の実現のために協同組合を組織する思想と実践」にも学びつつ、「食と農」「地域の医療・介護・福祉」をふくむ「持続可能なまちづくり」に踏み出しましょう。』そして、三つの領域で三つのステップを念頭に、(1-1)～(3-3) の 9 つのメッセージで構成し、各メッセージごとにも、さらに具体的な課題を示しています。「メッセージ」とした趣旨は、これらの内容は確定ではなく、“2030 年にむけて一緒に考えていきたい素材”であり、実践をうけて内容をどんどん深めていく事を期待してのことです。

三領域 三つのステップ	持続可能なまちづくり	持続可能な食と農の 関係づくり	持続可能な 地域医療・介護・福祉づくり
まちづくりのビジョン で一致する	(1-1)「持続可能なまちづくり」をめざして協働し、新たな社会基盤を整える。	(2-1) 農のあるくらしのために一生産地と消費地が近い東海の特徴を生かし、「食と農の関係」を軸に地域を元気にする。	(3-1) 安心してくらしのために一住民と行政と協働し、協同の地域包括ケアシステムを生活圏ごとにつくることに参画する。
互いの資源を持ち 寄り補いあって協働 事業をすすめる	(1-2) 社会的関係資本をいかした“協同の労働”で地域まちづくりをすすめる。	(2-2) 食と農を支えるために、いのちとくらしを守っている生産者を地域全体で支援する。	(3-2) 生活圏で支え合うために、くらしを支えあえるネットワークと「まちの拠点」を広げる。
人と人のつながりで 進める	(1-3) 誇りをもって今を生きる力を励まし“人と家族の多様なつながり”を支える。	(2-3) 食をとおして誰もが誇りを持つために、今を生きる世代が、食を見つめ、食を生かして人とつながる。	(3-3) 育ちあえる地域をつくるために、尊厳ある個人としての社会的支援力をたかめる。

総会記念企画では「持続可能なまちづくり」に焦点をあてて、岐阜県各務原市、三重県桑名市、愛知県設楽町での実践から学びました。これをスタートに 各地域・分野での積極的な話し合いを期待します。

¹ 「協同組合の 10 年へのブループリント」は、2020 年に「協同組合が経済・社会・環境の持続可能性において定評あるリーダーとなり、人々に最も好まれるモデルとなり、最も急速に成長する事業形態となる」青写真を示し、「参加」「持続可能性」「アイデンティティ」「法的枠組み」「資本」の 5 分野の課題を示しています。

パネルディスカッション

実践報告「2030年にどうむきあうか」

～各地の実践から、非営利・協同組織がつなげる意味を考える～



朝倉 美江 氏

コーディネーター 朝倉 美江 氏（金城学院大学人間科学部教授）

コーディネーター：進行を務めさせていただきます、金城学院大学の朝倉美江と申します。よろしくお願いいたします。

地域と協同の研究センターでは、持続可能な地域社会をつくろうということをメッセージに掲げています。今、私たちが考え、実践をしていかないと、この社会は持続しないという局面に立たされています。私たち一人ひとりが誇りを持って暮らし続けられる地域社会をどう創造していけばいいのか、今日は3人の方の実践を伺いながら議論していきたいと思います。それでは最初に篠原豊郷さん、よろしくお願いいたします。

中山間地（奥三河）で始まる住民自身の支えあいと地域拠点づくり

社会福祉法人ゆたか福祉会・生活サポートセンター名倉 篠原 豊郷（しのはら とよさと）氏

愛知県の東のはずれ、設楽町の名倉からやってきました。「福祉村キラリンと一歩（以下福祉村と記載）」における新たな取り組みを報告いたします。

生活サポートセンター名倉は、2013年に開所しました。設楽町は名古屋から1時間半のところにあり、人口は5,100人です。高齢化率は45%を越える過疎の町です。2013年度までは3つの入所と通所施設がありましたが、地域との関わりが弱い状況でした。2013年に生活サポートセンター名倉が開所となり、「地域と福祉村との架け橋になる」と、相談業務だけでなく、地域貢献活動の取り組みが大きなテーマとなりました。地域ふれあいサロンの「みなみ元気サロン」「ふれあいサロン大平」「キラキラサロン」という名倉の地域の中での3つのサロンを支援し、毎月1回行っています。こうした中で高齢者のみなさんにつながり、生活サポートセンターに地域の情報がサロンを通して寄せられてきます。生活サポートセンター名倉が開所する前は、「キラリンさんは地域の世話になってばかりで困ったものだ。」という評価でしたが、開所後は「キラリンさんに世話になってばかり」と言われるようになり、評価がはねあがったということです。こうした地域貢献活動を行ったことで、草刈りボランティア等の人手不足への協力もできました。

福祉村では人材確保がたいへんです。まず人材を育成しようと、福祉村で介護職員の初任者研修を開催しました。初任者研修の開催に際しては、設楽町と懇談し、町からお祝い金を3万円いただけることになりました。初任者研修は4万円で受けられますが、町から3万円のお祝い金があり、実質1万円で受けられることになりました。



篠原 豊郷 氏

2016年12月4日に、名倉小学校で「ささえあいの集い」を開催しました。158名の方々が集まりました。看取りの取り組みも報告しました。あの地域でも看取りができるということが感動を呼びました。そして設楽町の高齢者の現状を報告し、設楽町介護保険福祉計画の報告をしました。

また、福祉村で北設楽“ささえあい”サポートビジョンを提案しました。それは以下のようなことです。

・設楽町および北設地域における、全ての「困った」に応える住民主導型の地域包括ケアマネジメントの展開

- ・今ある社会資源と人材の発掘とつながり作り、北設全体での垣根を越えた相談支援ネットワークの構築
 - ・総合支援事業（平成29年）広域連合（平成30年）に連動した地域のニーズに密着した福祉事業の開拓
- そのために、拠点が必要ですが、名倉保育園の跡地を活用していくことができるようになりました。

福祉村の基本理念の一つに、「地域社会の一員として参加し、協同を進めます」ということがあります。この理念を大切に、引き続きがんばっていきたいと思っています。

コーディネーター: 篠原さんのご報告では、福祉が施設から始まったことを改めて振り返ることができました。そして施設福祉から地域に開かれた福祉へと発展していく実践が紹介されたと思います。その要がサポートセンターであり、地域の相談やサロン活動、福祉計画への参加などが実践され、そのなかで福祉村は地域社会の拠点になりつつあることがよく理解できました。地域のなかに福祉の拠点が、その拠点が地域の拠点になることを示されていたと思います。それでは次に各務原市の八木山地区社会福祉協議会の清水孝子さんから報告をお願いいたします。

自分たちの手で ささえあうまちを創る

各務原市八木山地区社会福祉協議会 事務局 清水 孝子（しみず たかこ）氏

各務原市の八木山の麓にいくつかの団地があります。その団地で、私は 5～6 年前に近所の女性から「清水さんは最後までここでくらすつもり？」と聞かれました。元気な今のうちに、坂の多いところはたいへんだからと引っ越していく人たちがいます。この町を終の棲家とするには、ここで支え合うしかないと思いました。高齢化率は各務原市で最高の地域で 38% です。そこで 2012 年から活動をはじめました。

2012 年に「災害時に強い地域づくり」をテーマに、レスキューストックヤードの講演会を開催しました。小さな分科会で話し合い、一人になっても、自分で調理したごはんを食べたいといった人がいて、今、月一回のランチ会をしています。この 5 月で 51 回目となりました。また「福祉のまちづくり」の話しあいを持って、ラジオ体操が始まりました。そして念願の「ささえあいの家」を、2014 年にオープンさせました。この拠点があったおかげでいろいろなことができるようになりました。この家は、地区社協の事務所であり、ささえあい活動センターです。サロン・相談・ボランティアコーディネート等を行っています。地域の人は何かあったら「ささえあいの家」と思う人が増えてきました。例えば、「急に出かけることになったから夫をみて」と相談があります。地域に頼りにされる「ささえあいの家」になりつつあります。

「ささえあいの家」のオープンは、ものを持ち寄る人がいて整備されてきました。営繕の会が立ち上がり、きれいにして、使い勝手がいいようにしてくれました。

いろいろな講座が開かれており、ほとんどの講座が、「私こんなことができる」と、講師自らの申し出でやられています。それらのことを通して人々がつながることこそ目的だと思っています。生活のこと、社会のことを語りあいたいと、月一回「暮らしを語る会」をやっています。「認知症茶話会」も開いており、「すっとした」と大声で言って帰る人もいました。地域には近隣の人を見守る人、見守られる人のグループがあります。そんな人が「ささえあいの家」でお茶会をやったりします。

ささえあいの家は、午前 2 時間、午後 2 時間、平日は当番が常駐します。現在 53 名が登録しており、月一回会議で運営を決めています。「ささえあいの家」の活動資金は市の社協からもらえますが、自力でも資金をと、アルミ缶集め、バザーも行います。

この町には平日 42 便ものバスが走っていますが、ほとんどからっぽです。「移動手段検討会」を持ちました。市役所、バス会社も一緒に 6 回開催し、まだ続けています。検討会の結果、市もバス会社も、私たちの意向を取り入れてくれ、私たちの望むバス路線にしてくれました。バス利用促進キャンペーンをしています。いつまでも自分で買い物・通院ができるようにと、見やすい時刻表をつくって配布し、「どういう乗り方するの」「お金を払うのは乗るとき、降りるとき？」と乗車体験ツアーをしています。

営繕の会は、今は地域のお助け隊として活動しています。雨戸の修理、エアコン修理を行う中で、友達も増えたと言っています。利用した人は、「何より、地元の人に関わってくれるのがうれしい」と言います。ずっと人間関係が続くという強みがあります。介護の困難さに直面している人が激増しています。私たちの「ささえあうまちづくり」は今緒についたばかりです。東になってネットワークをつくって、八木山地区の困難な状況を乗り越えたいと思っています。

コーディネーター: 八木山地区で、清水さんが「この地域で最後まで安心してらせるのか」という不安の声を上げられ、地域の人たちと一緒に学び、課題を明らかにしながらその解決方法を議論し、実践につなげていらしたという報告でした。共同で学び、実践することで不安が安心にかわります。「ささえあいの家」では地元の多様な人々がいろんな活動を担いあい、「買い物難民」問題も解決しつつありますが、今後さらに若い人たちや子どもたちの参加・活動も増やし、広げたいとのことでした。最後にみえ医療福祉生協の平田マリ子さんに報告いただきます。



清水 孝子 氏

笑顔あふれる多世代交流の居場所・まちづくり ～ガーデン大山田～**みえ医療福祉生協 桑名地域委員会 平手 マリ子（ひらて まりこ）氏**

桑名市は、2014年から改正介護保険法を先取りして、移行モデルとして2014年10月からプレスタートし、2015年4月から全国に先駆け一番にスタートし、2年が経過しました。大山田という地域は、団地が造成され40年になる地域です。60代後半から70代の方が中心の世代です。そこに大山田生協クリニックという生協の診療所がありましたが、10年くらい空き家になっていました。たくさんの人で片づけ、整理をしました。会議やサークル活動、若者支援、子育て支援ができるといいと話し合い、夢や希望が語られました。サロンだけでなく、部屋はあるから、いろいろやれるといいと考えました。

アンケートを実施したら、健康に関する要望が多く、何か手伝いたいという声もありました。みえ医療福祉生協の地域委員会だけでなく、年金者組合、新日本婦人の会と合同で運営委員会を持ちました。誰でも利用できるようにし、「ガーデンだより」を行政にも持って行きました。開所式には、行政や保健センター、社協、包括支援センター、大山田学区の連合自治会長、地域の自治会長等たくさんの方が参加してくれました。

「ガーデン大山田だより」は毎月発行しております。自治会の回覧板でもまわしてもらっています。公共施設に置いてもらい、行政にはメールで配信しています。

活動は広がり、「ママカフェひまわり」は月2回開催し、「多世代交流のガーデンキッチンたんぼぼ」は、「子ども食堂」としてスタートしました。目で見える貧困ではなく、一人で待っている小さい子がいて、こういう子たちを助けないといけないと思い、理解してくれる人に呼びかけ、自分たちの孫や、手伝ってくださるママさんたちの子どもと一緒にスタートしました。

地域には、健康な方がいっぱいいます。みんなで交流しながら何かやるきっかけになるといいと思い、健康体操をやっています。体操の後に1時間半くらいおしゃべりしていました。そこで「やりたい」という声があり、第一金曜日は歌声をやることになりました。第二金曜日はパッチワークです。第三金曜日は、健康づくりにかかわる講座をやります。第四週の金曜日はスタッフの会議と全体での検討の場になっています。

ガーデン大山田のモットーは、「地域まるごと健康で明るいまちづくり」です。赤ちゃんから高齢者まで、地域の住民みんながぐらしやすいまちづくりをする、そのために多様な要求の実現に取り組み、地域のセンター的な役割を果たすということを掲げています。

コーディネーター：みえ医療福祉生協は、地域活動を方針に掲げられ、それをもとにアンケート調査を実施し、地域住民のニーズに添った活動を展開されています。社会保障制度改革のもと医療や福祉が縮小される中で、どの地域でも地域住民の支え合い活動が重要な課題になっています。医療生協では「空き家」であった診療所を生協の地域委員会、自治会、行政、社協などとの協働によって「ガーデン大山田」という地域の拠点にされました。そこで子育て支援や介護予防をママカフェ、健康体操、歌声など多様な多世代交流活動として展開されていました。

コーディネーター（まとめ）：3人の方からご報告をいただきました。持続性という点からは、拠点に関しては3事例とも確保されていますが、資金、人材確保については今後の課題でもあり、篠原さんの介護職員確保の実践、住民参加の計画づくりや清水さん、平手さんの多様な住民の人々の参加を防災や健康づくりなど多様なプログラムを開発するなかで確保していくという取り組みなどが参考になると思います。

私たちには、社会、地域を良くしたい、変えていきたいという思いがあります。しかし他方、一億総活躍社会という政府の掛け声があります。それはGDPをあげることが目的になっています。昨今の情勢、国会の状況をみていると深刻です。しっかり声を出さないといけないし、行動に移すことと両方が必要です。この2030年のメッセージで言っているように、誰もが誇りをもてる社会、よりよい社会をつくるために、協同の価値が国際的に求められているのが今の時代ではないかと思います。

今日の3人のご報告は、私たちが心豊かに、みんなと助け合ってほしいという社会をつくるために、共同で知恵と力とお金を出すということが各地で広がっていることを示してくださいました。地域の課題に気づいた人たちが声を出し、学びあい、行動に移し、そのことが暮らしやすい地域をつくることにつながっているということが、今日のシンポジウムで共有できたと思います。



平手 マリ子 氏

地域と協同の研究センター第17回通常総会を開催しました！**「各地域でのよい確かな人のつながいづくり！」**

2017年5月27日（土）に、第17回通常総会を開催しました。総会への参加会員は158名（実出席65名、書面93名）、出席率63.7%でした。

西川幸城代表理事のあいさつにつづいて、第1号議案 2016年度事業報告と決算承認の件、第2号議案 第四期中期計画（2017年度～2020年度）の件、第3号議案 2017年度事業計画と予算決定の件、第4号議案 定款の一部変更の件について、向井専務理事から提案され、6名の会員から発言がありました。向井専務理事からまとめがあり、第1号議案・第2号議案・第3号議案は賛成多数で提案通り可決され、第4号議案の定款の一部変更の件は2/3以上の多数による賛成で可決されました。その後、第5号議案 役員の一部補欠選出の件について、役員選出管理委員から、愛知地域枠選出区で選出されている2名の理事より辞任の申し出があり、2名の理事の補欠選出について、第17回通常総会議案書にて立候補受付告示をしたところ、愛知地域枠選出区から2名の理事の立候補があったとの報告がありました。立候補者について役員選考委員から紹介があり、投票の結果、最低支持率は98%で2名は選出されました。



西川幸城代表理事

各会員の発言から（文責：事務局）

棕木会員：第1号、3号議案について補強させてください。「研究フォーラム地域福祉を支える市民協同」は、まちづくりや広い意味での福祉に関わる課題について、「地域福祉を支える市民協同」をテーマに、具体的事例に学びながら議論を重ねています。愛知県瀬戸市を拠点に活動する「NPO 法人窯のひろば」に関心を払ってきました。継続して関わっていただいている小木曾先生からは現代社会学という観点で学ばせていただき、議論しきれないような場合は、フォローアップ勉強会にも取り組んできました。午後の総会記念シンポジウムで「自分たちの手で ささえあうまちを創る」をテーマに実践報告する岐阜県各務原市・清水孝子さんには大きな関心を払いながら、ともに活動しています。「研究フォーラム地域福祉を支える市民協同」の成果を、皆さんに伝えるために報告集を研究センター総会にあわせて創刊することを目指して取り組んできました。少し手違いがあり残念ながら発刊することができませんでした。2017年度には、その報告集の気づきや考え方を広げる場の検討をしています。ぜひ、一人でも多くの方に読んでいただきたいと思います。

妹尾会員：三重地域懇談会の活動について紹介します。三重地域懇談会では、地域福祉とは何か、それを深め合おう、知っていこうと2016年度の計画を相談しました。最初学習会をしましたが、その中で「子ども食堂」にスポットを当て、実践をいろいろ学んできました。午後の総会記念シンポジウムで報告いただく平手さんのお話は、桑名市の「ガーデン大山田」で聞かせてもらいました。学んだことは、認識が違っているということでした。子ども食堂は「貧困」など、いろいろ困難な状況の方の集まる場所というイメージがありますが、実際には「本当に来ていただきたいみなさん」とっては「子ども食堂」という名称では参加しにくいということです。実践されている方は、そういうことを実感し、名称とか場の持ち方に工夫をしています。どなたでも参加できるような場にできると問題を抱えている子どもたちも参加できるようになるということもわかってきました。今年も引き続き「子ども食堂」のことを見聞きさせていただき、どういう風に立ち上ってきたのか、現状の問題はどうなのか、学んでいきたいと相談しています。そういう中で、くらしやすい地域づくり、地域で暮らす時にどういことができるのか、そういうことを交流していこうと相談しています。そんなことを報告できるようにプチ・フォーラムの開催を相談しています。

福井会員：岐阜地域懇談会の活動について紹介します。岐阜地域懇談会では、この間の取り組みを冊子にしてみました（2016年度発行）。2016年度は第13回東海交流フォーラムで報告いただいた中津川の「NPO 法人ひなたぼっこ（以下ひなたぼっこと記載）」を見学しました。「ひなたぼっこ」は小規模多機能の介護施設等4つの事業を展開しています。小規模の事業で、「みんなで運営、みんなで資金、みんなで働く」地域福祉への役割と多様な働き方の追及を理念としてすすめているところです。その代表の斎藤さんにお話を伺ってきました。

た。先週「ひなたぼっこ」の総会があり、参加してきました。非常に感銘を受けました。「自分が介護されたいくなる介護施設を」「人の尊厳を大切にしたい取り組みをさらにすすめる」という事業報告と計画でした。やさしさにあふれ、斎藤さんは「当事者の心の声を聞くことに挑戦している」と言われました。人と人との関係から生み出されていく心のつながりから支援の内容を改善していく取り組みであると言われていました。今後は、実践の様子を学びながら介護職員の方とも交流したいと思います。2017年度は第3回目のプチ・フォーラムを開催し、斎藤さんに報告をいただきます。2017年度の取り組みでは、先日「子ども食堂」を知るために「梅子の家」を訪問しました。また、寄り添いネットワークの活動について「NPO法人仕事工房ぽぽろ」の中川さんの話も聞いてきました。「ぽぽろ」は、1993年に不登校児支援の活動から始められたということです。現在、岐阜市では生活保護受給世帯で300人、就学支援世帯では4000人の子どもたちがいることを知りました。寄り添いネットワークの主な事業は、居場所づくり、就学準備支援、生活支援、食料支援等です。会員の中には、「(生協の)たすけあいの会」に頼みたいことがあっても経済的に厳しいとか、月末にお米がなくなる人もいるということを知りました。私たちに何かできることはないか、さらに調べたりつながったりしていきたいと話しています。

仲田会員：増刊「地域と協同」No. 6 についての意見です。「地域と協同」No. 6はテーマ『社会的課題の解決に向けた連帯～協同が生み出す「レジリエンス（困難からの復元力）」を問う～』です。子どもたち、高齢者、障害を持った人等、社会的弱者と言われている方の生活を支えるボランティアの取り組みが特集されています。この中で社会的課題に対する具体的な解決力が大事なことで、それぞれの実践の持つすばらしさが明らかになっています。加えて基調論文は柴田先生（金城学院大学講師、コープあいち有識者理事）による「困難からの復元力、レジリエンス、協同の解決力」の問題提起がされています。できればこのテーマをもう少し深めて、実践交流等できたらいいと思います。この増刊号を持ち寄って交流会をするような東海交流フォーラムのミニ版ができるといいと思っています。

田中会員：三河地域懇談会の活動について報告します。昨年は6月と8月に地域で実践している人達の話の話を聞きました。そして今年の4月8日（土）に第11回三河地域懇談会「豊橋生協会館に寄らまいかん」を開催しました。参加は約70名です。キャッチフレーズの「寄らまいかん」は三河の方言で「立ち寄りましょう」という意味です。三河地域懇談会ではこの3年間の「粋な老い支度」をテーマに活動をしてきました。その集大成として、今回の「豊橋生協会館に寄らまいかん」を開催しました。この会では、お昼に認知症予防にいいというカレーを手づくりで準備し、またコーヒー、ケーキも準備し、味わう企画もありました。その他メーカー三社（節辰商店、太田油脂、中央製乳）の参加と食と健康アドバイザーによる「認知症予防10か条」の紹介、バランスのよい食事をとることの大切さのお話、井関先生のクイズで学ぶ商品学、高橋先生の粋な老い支度の話もありました。頭と体を動かすコーナーもあり、ホコちゃん体操、ゴグニサイズ、貯筋体操、お話し会、おやつづくりなども企画しました。参加された方からは「楽しい会で知識も増えた」という感想をいただきました。今後、世話人会としては、多くの人が集まり、広げてつなげていける活動ができればと思っています。

橋本会員：「2030年へのメッセージ」に関して発言します。検討することを決めて、作成する検討チームをつくり作業をしてきました。地域と協同の研究センターの具体的な活動は、2号議案の「中期計画」で事業計画を立てております。その事業計画を通して、研究センター自身はどういう役割を果たしていけばいいのか、社会のあり方であるとか、協同組合のあり方について、研究センターとして方向性のようなものを提起し、問題提起ややるべきことはこうではないかとまとめたものがメッセージになっています。第4期の「中期計画」や今年度の事業計画の中で、「2030年へのメッセージ」は場をつくりながらさらに深く掘り下げていく性格のものです。今回の総会でメッセージとして決めるというのではなく、事業計画の実践の中にこそメッセージがあるとご理解いただきたいと思います。検討の際には、現状の社会をどうみるか、2030年という年をどうみるかについて議論がありました。もう少し厳しい情勢認識が必要という意見もありました。団塊の世代がすべて後期高齢者になるのが2025年です。その5年後の2030年を見通しながら、どういうことを



第17回通常総会

積み上げていったらいいか、研究センターが辿っていく道のガイドラインのような位置づけです。研究センターの具体的な活動を通して、メッセージを活かし、研究センターの活動を掘り下げていければと思います。

向井専務理事のまとめ

楳木さんの「研究フォーラム地域福祉を支える市民協同」の活動についての発言で紹介があった報告集は、この午後報告いただきます地区社協がすすめるまちづくりという切り口もありますし、名古屋市における市民活動、医療生協や地域の中での実践もあります。社会福祉協議会とか医療生協であったり、NPO法人であったり、多様な組織が地域の中でどうつながっているか、そのことは、市民が福祉を支えていく場合の受け皿なのか、受け皿でない場合はどういうことなのか、そういう報告集を準備しています。ぜひお読みください。



向井専務理事

妹尾さんからは、三重地域懇談会で「子ども食堂」から学んだことの紹介がありました。今日の資料の中には、愛知で「子ども食堂」の連絡会が発足するとのチラシが入っています。6月24日です。実践に関わっている人たちにとって、子どもたち、親も含めた貧困は、経済的な貧困であったり、親子関係であったり、社会的な問題であったり、単純に貧困という問題にとどまらない内容となっています。解決のためには関わりながら考えていくしかないという問題があると聞いております。集まってくる人たちにどう関わっていくのかは、これから始まるテーマだと思います。そんなことも含め、プチ・フォーラムも考えていただければと思います。

福井さんから岐阜地域懇談会の報告をいただきました。「ひなたぼっこ」の斎藤さんは、東海交流フォーラムで、個人の尊厳を尊重する実践の報告をいただき、たいへん感銘を受けました。ぜひ多くの方と共有したいと思います。岐阜で行うプチ・フォーラムの中で、「ひなたぼっこ」の斎藤さんに報告いただくことは、私たちのあるべき社会の方向を示し、それを学び合うことになるのではないかと思います。

仲田さんからは増刊「地域と協同」No. 6に関わって、ご意見をいただきました。地域懇談会の取り組みで知ることができた一つの社会を支える仕組み、レジリエンスというのは災害からの復興でも語られることですが、私たちの力だけでは防げないことがあるとしても、大きなダメージを受けないとか、ダメージを受けたとしてもその人が、その社会が回復する力を持っているという呼びかけです。今のような社会の見通しがつかない中で、第2、第3のセーフティーネットという意味も含め、協同組合、協同に関わってきた人の力が、次に向かってすすめていく足場をつくる大事な切口になるのではないかと思います。交流会を秋に開催できるよう検討したいと思います。

田中さんからは三河地域懇談会の報告がありました。今年の4月に開催した「豊橋生協会館に寄らまいかん」は、様々なテーマについて総合的に考える場を持っており、三河地域の活動の広がりを感じました。新城市作手（つくで）地域で生協が協力して開催しました「寄らまいかん」について、先日の日本協同組合学会春季研究大会で報告がありました。「寄らまいかん」は農業協同組合、生活協同組合、地域の住民の皆さん、いろいろな組織が重なり合って開催されています。地域の医療や福祉、健康問題について開催し、社会福祉協議会や保健センターも協力し、重なっている地域の問題を多様な組織が支えています。三河地域懇談会のつながりは、そういうことを地域が生み出す大きな力になってきているのではないかと思います。様々な協同の組織が地域を変えていく、そのつながり、実践は価値あるものではないかと思います。

橋本さんから「2030年へのメッセージ」について発言いただきました。メッセージを準備する過程で、2年前から「食と農」「地域福祉」「TPP」という三つのテーマで学習会を開催してきました。昨年はこうした問題にどう関わればいいのか、非営利組織が持っている特徴は何かを学ぶことができました。そして、私たち市民が今の社会に必要な資源をどう再分配するのか、どこに必要なものを分け合うのか、私たちは対話によってその資源の再分配ができる、協同組合・非営利組織が社会的に必要なことを選択できる合意をつくることできるというメッセージをいただきました。昨年の秋には、組織の協同も、そこにいる組合員と組合員のつながりから協同ができるのではないかと、構成員である組合員が協同することで協同組合間の協同があるのではないかとというメッセージもいただきました。そんな議論も含め「2030年へのメッセージ」は準備してまいりました。地域と協同の研究センターのつながりがあることで、いろいろな団体や個人がつくっていく未来を語り合うことができる、そんな共通のメッセージ・目標に「2030年へのメッセージ」がなるといいのではないかと思います。



情報クリップ

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定価/ページ
▶仲間の取り組みや 想いを共有して より良い仕事を ~~~~~ NAVI 2017. 6 No. 783 日本生活協同組合連合会	特集 仲間の取り組みや想いを共有してより良い仕事を <コープのある風景> パルシステム埼玉 <こんにちは！生協女子ですっ！> 鳥取県生協 福政尚美さん <地域に愛される店づくり・人づくり> 生協コープかごしま コープ川内店 <私の本ナビ> とくしま生協 <エッセイ わな猟師の春夏秋冬> 千松信也 <宅配・現場レポート> いわて生協 <生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP 商品> CO・OP わいっついスティックゼリー CO・OP るるんスティックゼリー <日本全国ふだんのくらしを支えたい> 福井県民生協 <想いをかたちにコープ商品> FSC® 認証段ボールで扱いやすさを追求 <突撃☆あなたの町の組合員活動> ユーコープ <明日のくらし ささえあう CO・OP 共済> 青森県民生協 <この人に聴きたい> 野菜スイーツ パティシエ 柿沢安耶さん <ほっとnavi> コープえひめ 大阪いずみ市民生協	2017 年 6 月 A4 版 36 頁 360 円
▶これからの生協を 支える人づくり ~~~~~ 生協運営資料 2017. 5 No. 295 日本生活協同組合連合会	●巻頭インタビュー わが生協、かくありたい！ 組合員に喜ばれる取り組みに光を当てる その姿勢があれば結果は後からついてくる コープみやざき●理事長 亀田高秀氏 特集 これからの生協を支える人づくり 1 「組織づくりは人づくり」を掲げ 選ばれる組織として採用活動を再開 ユーコープ●専務理事 土屋雅義氏 2 生協で働き続けたいと思う職員を増やすには コミュニケーションと職場環境の充実が不可欠 福井県民生協●常務理事 檜原弘樹氏 3 専門部署を立ち上げ、人づくりを推進 生協間の連携を深め、採用と教育を強化する みやぎ生協●人事教育部 部長 斎藤友章氏 4 人づくりも全国生協の連帯として取り組む 全国生協・人づくり支援センターがスタート 日本生協連●全国生協・人づくり支援センター センター長 石井亮 人づくり支援担当 中村美穂 ●これからの店舗事業のあり方を考える 第 7 回 多様化する変化を読み素早く対応し続ける オール日本スーパーマーケット協会●会長 田尻 一氏 ●全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ 第 19 回 生協加入と同時の注文利用もインターネットで実現 コープ九州事業連合●無店舗事業本部 副本部長 馬場潔氏 運営支援部 部長 行武秀泰氏 管理本部 機関運営・広報部 部長 石井梨香氏 情報システム部 部長 杉本幸隆氏 エフコープ●無店舗支援部 運営課 担当 下窪容子氏 特別企画 出産・子育てのトップブランドを通して 「イマドキ」の子育て世帯のインサイトを探る (株) ベネッセコーポレーション●情報サービス開発部 たまひよ・サンキュ！ ブランドマーケティング室 室長 山本沙織氏	2017 年 5 月 B5 版 96 頁 定価870 円

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定期分冊
▶JA自己改革の現場から 月刊 JA 2017. 6 vol. 748 全国農業協同組合中央会	特集 スゴイ農業、スゴイJA JA自己改革の現場から ① マーケットインに基づく攻めの米産地づくり —JAたじまの取り組み 西井賢吾 ② GI効果で10億7,000万円の売り上げに —JA鳥取いなばの取り組み 竹中明洋 農政トピック 畜産・酪農について考える 当面の最重要課題である生産基盤対策と酪農制度改革を概観する JA全中 農業対策部 きずな春秋 —協同のこころ— 童門冬二 津田大介 私のオピニオン JAトップインタビュー エコ農業で中山間地域の先進地へ 西井行雄 (高知県JA土佐れいほく 代表理事組合長) 展望 JAの進むべき道 「自己改革」に必要なこと 加賀尚彦 (JA全中常務理事) 新潮社の前・校閲部長が教える 広報誌の校閲 こんな時に要注意! 井上孝夫 第30回 広報活動優良JA紹介 総合の部 準大賞 JA松本ハイランド (長野県) 海外だより [D.C. 通信] 連載 73 ソニー・パーデュー農務長官の就任とトランプ政権における今後の農政 吉澤龍一郎	2017 年 6 月 A4版 48 頁 年間予約 5,109 円 (消費税込)
▶生協は若年層にとって「必要」な存在となれるか 生活協同組合研究 2017. 6 Vol. 497 公益財団法人 生協総合研究所	■巻頭言 車額 麻生 幸 ▶特集 生協は若年層にとって「必要」な存在となれるか 若年層の価値観と消費 原田曜平 若者の経済格差と家族形成格差 久我尚子 若年層の情報行動 橋元良明 なぜクラフトビールは若い世代に好まれるのか? —ヤッホーブルーイングの戦略から解き明かすヒント— 若年層調査報告 —生協宅配の認知度と利用度— 稲垣 聡 宮崎達郎 ■研究と調査 東日本大震災被災地訪問報告 山崎由希子 ■時々再録 やめられない、とまらない — スマホの引力 白水忠隆 ■本誌特集を読んで (2017・4) 及川昭夫 ・ 村 千鶴子 ■私の愛読書 岸見一郎 古賀史健共著 『嫌われる勇気』『幸せになる勇気』 井形貞祐 ■新刊紹介 濱田武士著 『魚と日本人 食と職の経済学』 鈴木 岳 ■研究所日誌 ●生協総研賞 第15回(2017年度)生協総研賞 「助成事業」の応募申請要領(抄) ●公開研究会 これからの家計簿 —手書きの良さとアプリの良さ— ●全国研究集会 (9月30日開催予定) 地域における生協共済の役割とは何か (仮題)	2017 年 6 月 60 頁 B5 版

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定価
▶米国医療機関の 非営利性と公益性	農協組合長 インタビュー (39) 技量を出し合って助け合いの地域社会を 鈴木 勝 医療機器の組織購買で事務局機能の充実 臼井 靖 院長リレーインタビュー (297) 効率の良い病床稼働を実現したい 井上 元保 二木教授の医療時評 (147) 「医師・看護師等の働き方ビジョン検討会報告書」の複眼的検討 一医師需給分科会「中間とりまとめ」との異同を中心に 二木 立 厚生連医療と財務省「社会保障改革の方向性」 東 公敏 現代社会と協同組合 (3) 雇用不安と格差拡大が深化している現代社会 北出 俊昭	2017 年 6 月 B5 版 80 頁 文化通信 編集部 03-3370-2529 *注
文化連情報 2017. 6 No. 471	アメリカの医療制度 (9) 米国医療機関の非営利性と公益性 高山 一夫 韓国農業の実相ー日本との比較を通じて (10) 米の生産費と所得 品川 優 第 21 回臨時総会を開催し全議案を可決 臨床倫理メディエーション (13) 感情と意思決定 (1) 「選択」の背景にあるもの 中西 淑美 酒造業におけるバイオマス発電の導入 ー宮崎県都城市の事例 大平 佳男 岡田玲一郎の間歇言 (142) 診療、介護両報酬は是正の積み重ねでは 岡田玲一郎 駐日デンマーク王国大使館訪問記 ーサードジェネレーションという考え方 デンマーク&世界の地域居住 (97) オランダの革新 15 インフォーマル・ファースト・モデル 松岡 洋子 熱帯の自然誌 (15) キリスト教 安間 繁樹 イギリスの社会的企業 社会的家主: G e n t o o (3) 住宅を見る 小磯 明 「農業経営者」として生き残る 熊谷 麻紀 ●野の風●ワンちゃんのお散歩代行いたします! / 小山 由美子 ◆平成 29 年度厚生連院内感染予防対策「基礎」研修会開催のお知らせ □自著を語る『反トラスト法と協同組合』 / 高橋 雅男 ▶線路は続く (111) 再び逢えます片上鉄道 / 西出 健史 ▶最近見た映画 マンチェスター・バイ・ザ・シー / 菅原 育子	
地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています (主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。		

地域と協同の研究センターの 6 月活動

6 月 1 日 (木)	名市大寄付講義⑦
6 月 6 日 (火)	愛知の協同組合間協同と 2017 国際協同組合デー企画相談会
6 月 8 日 (木)	名古屋市立大学寄付講義⑧
6 月 9 日 (金)	岐阜地域懇談会・世話人会
6 月 15 日 (木)	名古屋市立大学寄付講義⑨
6 月 17 日 (土)	第四期研究奨励助成第一次研究報告会
6 月 19 日 (月)	尾張地域懇談会・世話人会
6 月 21 日 (水)	三河地域懇談会・世話人会 (荒天のため延期)
6 月 22 日 (木)	名古屋市立大学寄付講義⑩, 研究フォーラム「職員の仕事を考える」世話人会, 三重地域懇談会・世話人会
6 月 23 日 (金)	研究フォーラム「食と農」世話人会, 研究フォーラム「地域福祉を支える市民協同」世話人会
6 月 26 日 (月)	NEWS 編集委員会
6 月 29 日 (木)	名古屋市立大学寄付講義⑪, 常任理事会
6 月 30 日 (金)	協同の未来塾①

企画案内

南医療生協「よりあい10万人会議」第25回

昔の子ども 今の子どもも

まざりあい交流会

- 期日：2017年7月15日(土) 午後2時から
 ■会場：南医療生協 南生協病院施設内 コープ健診・フィットネスセンター3F
 ※南生協病院：名古屋市緑区南大高2-204

●企画内容●

関西の有名大学卒の弁護士
 教えます、勉強のコツ
 30点アップも夢じゃない

夏はやっぱり

金魚すくい



ちょっと聞かせて
 横丁、南生協病院
 活用アイデア

大卓球大会
 緑区の張本君は誰?!

病院・横丁のお店 大試食会もあります。

主催：南医療生活協同組合 お問い合わせ：052-625-0620

書籍案内



米政策改革による水田農業の変貌と集落営農
 兼業農業地帯・岐阜からのアプローチ

著者：荒井 聡 単行本:309ページ 出版社：筑波書房

発売日：2017/4/10 定価：3,780円(3,500円+税)

著者 荒井 聡氏(福島大学教授)からのメッセージ

本書は、米政策改革大綱(2002)で「集落段階での話し合いを通じ、地域ごとに担い手を明確化する」ことの提起を受け、担い手の明確化がどのように進められたかを、主として岐阜県の水田農業経営を対象として明らかにしています。水田農業の動きを概ね5年間隔で区切り、IV部・13章に分けて成果を収録しています。経営調査を行った集落営農数は延べで50組織にのぼります。米価下落などで個人経営が立ち行かなくなり、集落営農への依存を高めてきています。個人と組織が支えあう関係が水田農業経営の今の姿です。地域コミュニティの再編とあわせながら、新しい水田農業の担い手が形成されています。東海地域のこれからの水田農業のあり方を考える題材として一度手に取ってみてください。末筆になりますが、岐阜大学在籍中は大変お世話になりました。また、福島への引続のご支援のほど宜しく願い申し上げます。紙面を借りてお礼を申し上げます。

研究センター 7月の活動予定

- 7月1日(土) 共同購入事業マイスターコース①
 7月6日(木) 名古屋市立大学寄付講義⑫
 7月7日(金) 2017国際協同組合デー記念行事in愛知
 7月8日(土) 理事会
 7月13日(木) 名古屋市立大学寄付講義⑬,
 組合員理事ゼミナール⑥
 7月18日(火) 研究フォーラム食と農・世話人会
 「コープあいち・いのこの樹」見学
 7月20日(木) 名古屋市立大学寄付講義⑭
 7月21日(金) 常任理事会
 7月22日(土) 岐阜地域懇談会「プチフォーラムinぎふ」
 7月27日(木) 名古屋市立大学寄付講義⑮,
 協同の未来塾②
 7月28日(金) 生協の(未来の)あり方研究会
 7月29日(土) 共同購入事業マイスターコース②
 7月31日(月) 尾張地域懇談会・世話人会

2017年6月25日発行(毎月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

5月29日 第32回くらしを語りあう会 開催 — みんなが気軽におしゃべり、発信します。

「くらしの中から考えてみよう」……元モーレッツ社員の身におったことから

おしゃべりが始まりました。

団塊の世代・地域デビュー



1949年うまれ、月140時間の残業を「あの時はよく働いた！楽しかった」と語る企業戦士。そんな彼が定年退職して、里山が美しい田舎で地域デビュー（区長就任）区長として、地域のくらしに関わっていく中で、彼の中で「何かが変わった！」

— 00ちゃんとおばあちゃんになった、川原の草刈をするようになった。
そして、次期区長のために、「区長マニュアル」を完成させた！（一部）

その変化についての報告から、「くらしを語りあう会」は、もりあがりました。

一部紹介します。

- ・地域は、こういった 普通の人々によって支えられている♡
- ・地域の生活、今までのやり方では支えられなくなっている。
これから……高齢者を活かさないともたなくなっている！
企業で培った能力をいかし、でも、働き方は変わって
くるはず。
- ・せっかく地域デビューした彼の、次のステージがどうなるのか？
そこに注目したい。

ここで おしらせ……

プチフォーラム in ぎふ 13:30～15:00

7月22日（土）

ユ-70 ぎふ本部

「自分たちが受けた介護を……」の思いから「ひなたぼっこ」を立ちあげた「斎藤啓治」さんのお話をききます♡



働くことの
意味について
考えてみましょう

どなた
でも
参加
できます！

◆ この会は、東日本大震災後「新しい日常へ — 文集 3・11後のくらし」を作成した会員の自主的な集まりです。どなたでも参加できます。— よろしければご参加下さい。

【第33回くらしを語りあう会】 — 会員募集！

日時：2017年8月1日（月）13時30分～15時00分
会場：本山生協生活文化会館 応接室 差し入れ大歓迎

お問合せ・連絡先 渡辺 勝弘（地域と協同の研究センター事務局）
TEL：052-781-8280 FAX：052-781-8315
E-mail kwatanab@tcoop.or.jp

コープカレッジあいち ごみ山や路上でくらしている子ども達のことを知っていますか。

フィリピンでの協同組合づくりの支援から ～NPOアイキャンの活動～



吉田 文さん



パヤタスごみ処分場
ごみ山はどんどん大きくなっています。

フィリピンで「協同組合」設立にとりくんでいる認定NPO法人「アイキャン」の吉田文さんを講師に、お話を聞きます。

フィリピン最大のごみ処分場、パヤタス地区の住民たちは、たいへん厳しい環境で生活しています。ごみを集めてくらしています。その中で、何が問題か知り、どうすればいいか考え、できることを行動する中でエンパワメントを重ねたお母さんたちがいます。

路上の子ども達が始めたパン屋さん、その後の話を一緒に聞きましょう。「カフェを成功させて、稼いだ半分のお金で自分や兄弟、仲間と仲間の家族の生活を安定させたい。残り半分は、今も路上にいる子どもたちが人生をいい方向に変えられるように使いたい。絶対にカフェを成功させる、僕はこれにかけているんだ。」と熱く語るジョネル君も、少し前は路上の子どもでした。いまカフェはどんな様子でしょうか。

フィリピンの現状とアイキャンの支援の活動を知り、私たちにできることを考え合いませんか。ぜひ、ご参加ください。

参加者の声

- ・理不尽で平等ではない世界ですが、少しでも変えようと努力する子ども達に勇気をもらいました。
- ・もっと生協のみんなに伝えたい！

アイキャンの取り組み、現地の様子を、スライドを使ってわかりやすくお話しします。私たちが送っている書き損じハガキの報告もさせていただきます。

【日時】 2017年 7月22日（土） 10時～12時

【場所】 生協生活文化会館

地下鉄「本山」駅4番出口より徒歩2分

【講師】 認定NPO法人 アイキャン 吉田文さん

【参加費】 無 料

【託児】 6ヶ月から、お一人2時間200円
申込締切 7月12日（水）

□お申し込み・お問い合わせは
（月～金 10時～17時）
TEL
052-703-6055 まで



カリエ カフェ

Mail Koyultou@tcoop.or.jp
□申し込み締め切り
7月19日（水）

写真はすべてアイキャンより提供いただきました。



とうかい食農健サポートクラブ 第17回総会記念シンポジウム

“四季を通じて「食」と「農」と「健康」のつながりを実感しよう!”

とうかい食農健サポートクラブでは、平成28年度「私達の地域の伝統野菜と食文化」をテーマに4回の連続企画に取り組んできました。平成29年度は、「伝統野菜と食文化」で知ることができたことを大切にしながら、視点を広げ、サポートクラブがテーマとしている「食」と「農業」、そして「健康」を、そのつながりの中で考え、目指したいことを考え合う場をつくっていきたいと思います。総会記念シンポジウムでは、四季を通じた「食」と「農業」そして「健康」について、そのつながりの中で、それぞれの課題を考え、切り拓こうと取り組まれている事例を紹介し合います。ぜひご参加ください。

◆日時：平成29年7月9日（日）

13時30分～16時

◆会場：生協生活文化会館4階

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

（生活協同組合コープあいち本店のある建物です）

◆講演：竹谷 裕之 氏

（とうかい食農健サポートクラブ会長・名古屋大学名誉教授）

事例報告：とうかい食農健サポートクラブ幹事から
ディスカッション

◆参加費：無料

◆募集定員：80名



とうかい食農健サポートクラブのご紹介

とうかい食農健サポートクラブは、さまざまな分野の有志で自由な討議を経て平成12年2月設立されました。設立の目的は、東海の地域で、「消費者や農業・食品産業・教育・医療・行政機関等、幅広い分野の関係者（注：食・農・健に関わる）によるネットワークを構築し、人的交流と情報・意見交換等を通じて、健全な食生活の普及、消費者・実需者ニーズにあった食料の供給、農業体験、食農教育の普及を期すこと」と「とうかい食農健サポートクラブ規約」で定めています。

とうかい食農健サポートクラブの活動は、愛知県・岐阜県・三重県で活動している様々な分野の組織、人とプロジェクトを掘り起こして、その事例に学び、それをつなげることによって、食・農・健に関する分野で、活動の横連携をとりながら、上記の目的を達成できるように活動してきました。今年度は“四季を通じて「食」と「農」と「健康」のつながりを実感しよう!”をテーマとし、活動していきます。まず総会記念シンポジウムで「食」と「農」と「健康」を、そのつながりの中で、事例を紹介し合い、考え合います。

とうかい食農健サポートクラブ事務局 担当：大島

（特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター内）

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315 E-mail: AEL03416@nifty.com

主催：とうかい食農健サポートクラブ

参加申し込み要領 会場案内は次ページ

幹事会では、こんな事例を紹介したいと相談しています！

体験農園が増えてきたが、中心になっている人は、農家ではない、市民・消費者だったり！

「食」から考えることで、農の可能性も広がる？
耕作放棄地も活用して！

この地域での農福連携で
見えてきたことがある！

「食」から考えるとこんな事例が！
「健康」からはこんなことも考えることができる！

オリパラ（オリンピック・パラリンピック）に向けて食材の安全確保の基準でHACCP（ハセップ）とかGAP（ギャップ）とか言われているけど、それって何？

とうかい食農健サポートクラブ総会記念シンポジウム参加申し込み

●申し込み方法：FAX、E-mail、又ははがきに、下記の要領でご記入の上、お申し込み下さい。

「参加票」をお送りしますので、当日お持ち下さい。

●申し込み期限：平成29年7月3日（月）（先着順・定員になり次第締め切り。）

●募集対象：食育活動、生産、流通に関心がある、または取り組んでいる会員の皆さん、市民のみなさん。

●問い合わせ：とうかい食農健サポートクラブ事務局

〒464-0824

名古屋市千種区稲舟通1-39 NPO法人地域と協同の研究センター内 担当：大島

電話052-781-8280 FAX052-781-8315

E-mail: AEL03416@nifty.com

【 FAX申し込み用紙 】

所属 名前（ふりがな）	電話番号	住所（参加票送付先）	通信欄
所属 名前（ふりがな）		〒	

◆お知らせいただいた個人情報につきましては、今回の企画運営に関わってのみ使用いたします。

会場案内

●会場 生協生活文化会館 4階

●住所 名古屋市千種区稲舟通り1-39

<会場への交通>

地下鉄東山線 本山駅下車

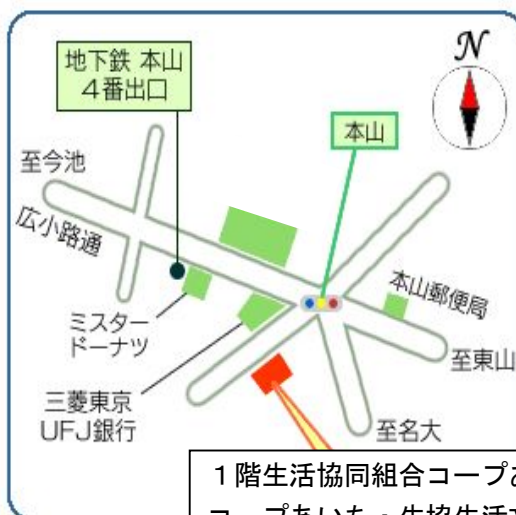
4番出口より徒歩2分

とうかい食農健サポートクラブ
事務局担当 大島

電話052-781-8280

入会の申込みも
随時受付中です。

AEL03416@nifty.com



1階生活協同組合コープあいち本山店
コープあいち・生協生活文化会館 4階
リニューアルしたばかりの生活文化会館です！